

やぶなべ

青森県立青森高等学校生物部 発行

誌名	やぶなべ
号/発行年/頁	2 / 1956 / 20-22
タイトル	龍飛におけるカバイロシジミについて
著者名	沢谷義貞

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

龍飛におけるカバイロシジミについて

沢谷 義貞

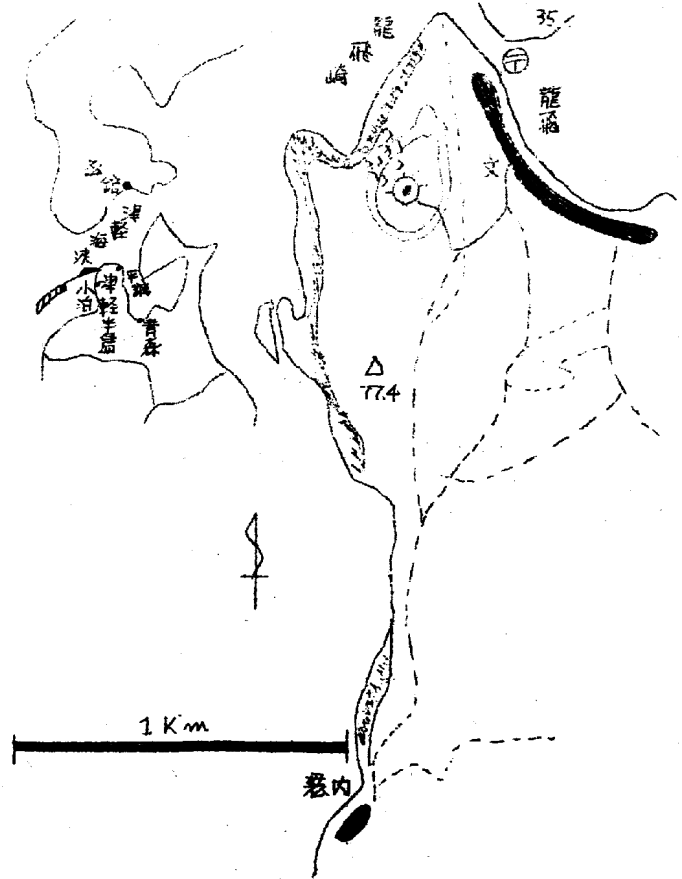
序 言

本州におけるカバイロシジミについては、1952（昭和27年）12月に弘前高校及び弘前中央高校生物クラス出版によるBlakiston 才1巻才2号により、分布区域並びに、龍飛における採集記録等が詳しく掲載されたのであるが、これは採集期間も10日程度で、カバイロシジミ産未日数から見れば割合短期であり、採集回体数も少なく、この結果よりカバイロシジミについて深く究明しようとする場合に極めて不都合であると思われる。そこで竜飛岬におけるカバイロシジミについて棲息地及び自然的状況等の面から、現在までの観察・採集等によって得られた知識をもととして記すことと致します。

尚これを書くにあたり、色々と同向にお答え下さった弘前山内博尚氏並びにデータをお寄せ下さいました弘前大学斎藤和夫氏に、深く感謝の意を表わします。

季節及び地形

竜飛岬は津軽半島の最北端に位置し、四季の区別も割に明確である。東面にはそれぞれ「たかの崎」「叔現崎」が突き出ており、北は津軽海峡の潮流を隔てて北海道の陸山と相対している。灯台付近はこのあたりでは最も高い地点で、乾燥地帯ということが出来る。東側の斜面は竜飛小中学校を除いては一面にイタヤカエデの木に覆われ、従って昆虫網の使用は甚だ困難をきわめ目撃せる蝶も取り逃すことは稀ではない。これに反して灯台を含む附近の南面及び西面は一年生草木植物が繁り、目立って、ワレモコ一の群衆が多いようである。例年であれば11月下旬に初雪を見、12月に入れば本格的に冬の季節となる。雪どけは翌年の3月中旬頃で、4月上旬ともなれば雪はほとんど消え去りいたる所に春を思わせる。



棲息地の状況

カバイロシジミの最も多く棲息する

と思われる灯台北面の地点は、前述の如く雪どけも早く従って岩石の多い乾燥地であり、絶壁とは、云われないまでも切り立った断崖のくぼ地状の場所である。断崖のきれたあたりは部落とは反対側の激しく*
(20頁下方へ続く)

(21頁より) *潮流が渦を巻く海岸に続いている。くびち状の帯にはくずれ落ちた赤色の岩石が一面に積み重なっている。その向よりカバイロシジミの食草であるヒロハクサフジ^④（一名ハマクサフジ）が登集して自生している。

採集頭数及び飛来期間

例年カバイロシジミの初期飛来は7月中旬頃で、7月下旬（20日）から、8月上旬（7日）にかけて最盛期と見てよいようである。この期間では採集個体数も極めて多く、天気さえ良ければ一日に付き10～15頭位の採集も可能である。今年の採集個体数を示すと左表のようになっておりますが、ここで注意して見なければならぬと思われることは、5.6.7月の3ヶ月間の天候の変動が、カバイロシジミ初期飛来及び最盛期にどのように影響を及ぼすかということである。弘前高校による巻飛での採集（1952年）は主として、巻飛部より2km位はなれた釜内方面に於いて行われたようであるが、例年灯台附近で最盛期の折りに釜内方面に採集に出向いた場合4対1位の割合で、灯台附近一帯の個体数はるかに多いのである。さて先に述べた5.6.7月の天候の状態がカバイロシジミの発生に如何に影響を及ぼすかということであるが、試みに今年のデータへ目を匯してみる時に、最盛期が例年よりも5～7日位遅れ8月中旬がその頂上となっており、9月14日に於いても尚採集記録があり、二においても一團向位のずれがある。今年は例年に比べて各地とも全般に、気温の低下が伝えられ、巻飛も5.6.7月頃低温が続いたとのことでそのために例年よりも遅れて、8月中旬がその最盛期となったのではないか。（22頁へ）*

※ (20頁から)

考 察

以上竜飛に於けるカバイロシジミについての概略を述べたのであるが、5.6.7月の3ヶ月間の天候ニ
 して気温の低下が発生期を遅れさせることは確実であり、例年のデータに目を圍す時、初期飛来が7
 月中旬で8月上旬が最盛期となっており、8月下旬で終りを告げる事より、2回の発生は不可能であ
 ると断定することが出来ると思う。又竜飛崎における食草も灯台附近では笹葉、カバイロシジミの採
 集個体数並びに目撃頭数が多いのに反し、器内方面では食草も散在する程度で、採集個体数並びに目撃
 頭数も比較的少ないことから、竜飛崎に於けるカバイロシジミの食草はヒロハクサフジ一種であると考
 えられる。尚これらの事については今の所カバイロシジミの飼育は全行っており、私の推量である
 ことを附言しておきます。

註 ① 山内博尚氏のお話では、ハマエンドウと同定することが有力であるとのことでしたが、自生
 している場所及び形態等からクサフジにも類似する臭があり、従って従来まではハマエンドウ、
 クサフジの2つの説がありました。本校生物部植物班の協力をも得て竜飛崎の食草を同定した
 結果ヒロハクサフジと断定されましたので発表いたします。

②③ は山内氏の御啓承を得る。

参 考 文 献

牧野 審 太 郎 日本植物図鑑
 江 崎 悌 三 } 共著 原色日本蝶類図鑑
 横 山 光 雄 }

他に新昆虫ムシベン等参照とする。

採集月日と採集頭数

採 集 月 日	7月29日	30	31	8月1日	3	6	7	9
採 集 頭 数	2♂♂	5♂♂	9♂♂	2♂♂	1♂	3♂♂	4♂♂	2♂♂1♀
採 集 月 日	8月12日	13	15	21	23	24	9月1日	4
採 集 頭 数	9♂♂1♀	13♂♂	12♂♂	2♂♂	1♂	1♂	1♂	1♂